

# 2-3

## 教師の「読解力」向上の取り組み状況

ベネッセ教育研究開発センター 小林 洋

### はじめに

本節では、教師に対して実施した「読解力」向上に関わる取り組みの調査における回答状況を報告する。調査の項目は大きく、「読解力」向上への「学校としての組織的取り組み」に関する項目と「教師個人の取り組み」に関わる項目に分類される。これらは、それぞれ、本章1節の「『読解力』向上に関する総合的な取り組み」の構造モデル(以下「構造モデル」と称す)の「Ⅱ. 教育環境の整備・充実」「Ⅲ. 日常的な学習指導」に主に相当するものである。今回の教師に対する調査では、「読解力」という言葉は一切用いていない。ベネッセ教育研究開発センターの別の調査が示すように、学校現場における「PISA型読解力」への認知度はまだ低い状況にあるからである(『中学校の学習指導に関する実態調査』2006)。しかし、「PISA型読解力」の育成をとくに意識していない取り組みであっても、その育成・向上に資する取り組みは、すでに少なからず存在している。今回の調査の枠組みは、現状におけるどのような取り組みが「読解力」育成・向上に対しても有効であるかについて我々の仮説を示すものでもある。この仮説が実際にどの程度妥当なものであるかは、次章以降で「読解力」調査問題の実施結果とのクロス分析で検証されることになる。

### 1 「読解力」育成に関わる「学校としての組織的取り組み」の状況

図表2-3-1は、第2章1節の「構造モデル」の「Ⅱ. 教育環境の整備・充実」に示した「読解力」育成に関わる「学校としての組織的取り組み」の項目に対する回答状況を示すものである。

具体的な項目は、「Ⅱ-b 豊かなカリキュラムの整備・充実」「Ⅱ-c 実社会への適用の場や機会の設定」および「Ⅱ-a 豊かな素材に触れる環境

の整備・充実」という3つのカテゴリーに分けて設定している。なお、「Ⅱ-a」については、校長のみの設問(Ⅰ-bに対応)としており、本節ではふれない(本章4節参照)。

以下、「とてもあてはまる」とするトップボックスを選択した割合に注目し、回答状況を見ていく。

#### 「豊かな教育カリキュラムの整備・充実」

「豊かな教育カリキュラムの整備・充実」のカテゴリーでは、「①各教科での基本的指導」から「⑦職場体験・キャリア教育」の7つの項目を問うている。

この中で、「とてもあてはまる」とするトップボックスを選択した割合が最も高いのは、小学校では、「問6-4 各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入

れている」という項目(31%、中26%)、中学校では「問6-7 職場体験や社会人講師による講話等を行い、勤労観やキャリア意識を養う活動を取り入れている」という項目である(52%、小9%)。「グループでの協働」は、セカンドボックスまでの合計で見ると、小学校・中学校ともに大半の学校で、これに関わる何らかの取り組みが行われていることがわかる。学んだことを相互に伝え合い考

図表2-3-1 「読解力」向上に関わる「学校としての組織的な取り組み」の状況

とてもあてはまる
  まああてはまる
  あまりあてはまらない
  まったくあてはまらない
  無回答

設問のカテゴリ	小学校教師(%)					設問番号	設 問	中学校教師(%)				
	100	80	60	40	20			0	20	40	60	80
II-b 豊かな教育 カリキュラムの 整備・充実	①各教科での 基本的指導	1.4	29.3	55.4	11.0	問6-1	各教科において、「思考・表現」の指導の在り方や意義が明確にされ、それに沿った指導がなされている。	13.3	52.8	30.6	0.9	
	②読書活動	2.9	32.5	39.7	21.1	問6-2	各教科で「必読書」や「参考図書」を設定するなど、子どもたちの読書習慣を培い、主体的な読書を促す取り組みを行っている。	18.4	34.0	38.2	7.5	
	③課題探究 活動	2.9	17.7	59.1	19.7	問6-3	各教科の学習指導において、課題探究型の活動を取り入れている。	18.0	53.9	24.6	1.3	
	④グループ 協働活動	2.8	8.6	56.8	31.4	問6-4	各教科の学習指導において、グループでの協働や話し合い、交流等の要素を取り入れている。	25.6	58.3	14.3	2.1	
	⑤ディベート ・討論活動	0.7	39.6	45.3	8.1	問6-5	各教科の学習指導において、ディベートや討論活動を取り入れている。	7.1	39.1	45.3	6.6	
	⑥メディア 表現活動	3.1	31.7	49.9	12.7	問6-6	各教科の学習指導において、コンピュータやビデオ、ポスター等いろいろなメディアを用いて、自分の考えを表現する活動を取り入れている。	12.4	47.6	35.3	3.2	
	⑦職場体験・ キャリア教育	3.2	15.8	40.9	30.8	8.9	問6-7	職場体験や社会人講師による講話等を行い、勤労観やキャリア意識を養う活動を取り入れている。	51.5	38.7	7.9	
II-c 場や社会への 機会の設定 の適用	①総合的な 学習	1.8	18.8	53.7	21.9	問6-8	総合学習等において、実社会や日常生活に関わるテーマや題材を扱い、実際の場面で体験・実感する機会を取り入れている。	43.2	44.0	10.3	1.5	
	②各種コン クール	3.8	17.0	54.3	23.8	問6-9	各種のコンクールへの応募を促したり、学習の成果を保護者や地域社会に向けて発信するような場や機会を意図的に用意したりしている。	35.9	46.4	15.0	0.9	
	③家庭での 活動	1.5	30.7	53.7	11.7	問6-10	学校で学んだことを、家庭や身の回りの事象に应用したり、試したりするような課題や機会を用意している。	11.5	39.7	44.4	1.7	
	④地域への 発信	3.3	6.4	45.3	36.0	8.2	問6-11	学習の成果を地域社会に向けて発信したり、地域社会の抱える課題への解決提言を目標としたプロジェクト学習を取り入れたりしている。	12.2	36.7	39.7	9.0

「設問のカテゴリ」欄に示した記号や番号は、第2章1節の「読解力育成に関する取り組みの構造モデル」内の項目との対応を示す。

え合って集団で思考を高め合う活動は、「読解力」育成にとって実際有効であることが後章で実証されている。また、「職場体験」などのキャリア教育に関わる取り組みも、子どもの社会認識と自己の適性理解の形成を促進し、学びへの意欲を高め、このことを通して「読解力」育成にも長いスパンで影響を与えていく活動と考えられる。しかし、小学校での取り組みは、まだ低調であり、今後、小学校段階からの系統的なキャリア教育の展開が期待される。

上の項目に次いで、取り組みの割合が高いのは、小学校では、「読書活動」(問6-2)や「課題探究活動」(問6-3)、中学校では、「グループ活動」(問6-4)や「読書活動」(問6-2)となっている。「読書活動」が「読解力」育成に有効であることは言うまでもない。しかし、後章(第4章“Special View”)で示されているように、日本の子どもの場合、「本を読めば読むほど『読解力』が高くなる」という状況にはなく、このことは読書活動の在り方には改

善の余地があることを示唆している。また、「課題探究活動」は、これまで「総合的な学習の時間」を中心として取り組まれてきたものであるが、課題探究型の学習を通して育成される問題解決的な力は、「読解力」とも関わりの深い力である。教科学力は平均以上でありながら「読解力」が低い子どもの特徴の一つは、この「問題解決力」に課題があることが後章で示されている。

このカテゴリで、最も取り組みの割合が低いのは、小・中学校ともに、「ディベート・討論活動」(問6-5)となっている(小8%、中7%)。ディベートは、論拠を明らかにして論理的に相手を説得する力の育成を目指すものであるが、これはテキストを批判的に読み解き、根拠に基づいて自分の意見を論述する力と言える「読解力」の向上にも有効であると考えられる。「集団での学び合い」の手法の一つとしても、積極的に活用していくことが期待されよう。

## 「実社会への適用の場や機会の設定」

次の「実社会への適用の場や機会の設定」のカテゴリでは、「①総合的な学習」から「④地域への発信」の4つの項目を問うている。「読解力」は、単にテキストから情報を読み取り考えるだけではなく、自分の意見を社会に発信し効果的に社会参画していくことをも視野に入れた力である。また、このような発信の機会は、学習に目標を与えるとともに、発信したことに対する社会的な評価を得ることによって自己理解を深める機会ともなり、学びへの意欲を高める契機ともなる。このカテゴ

リーでは、「問6-8 総合学習等において、実社会や日常生活に関わるテーマや題材を扱い、実際の場面で体験・実感する機会を取り入れている」(小22%、中43%)、「問6-9 各種コンクールへの応募を促したり、学習成果を保護者や地域社会に向けて発信するような機会を意図的に用意したりしている」(小24%、中36%)といった項目は、小・中学校ともに比較的高い数値を示しており、とくに中学校で力を入れて取り組まれていることがうかがえる。

## 2 「読解力」育成に関わる「教師の日常的な学習指導」への取り組み状況

次に、「教師の日常的な学習指導」(「構造モデル」のⅢの階層)の取り組みの状況を見ていく。

この取り組みには、「Ⅲ-a 各教科での多彩な情報活用の取り組み」「Ⅲ-b 問題意識や意欲の喚起」「Ⅲ-c 学び合う集団の形成」「Ⅲ-d 基本スキル指導と演習」「Ⅲ-e 適切な課題・教材

の開発」「Ⅲ-f モニタリングスキルの育成」「Ⅲ-g 読解活動へと誘う強化因子の付与」の7つのカテゴリーを設けている。

では、**図表2-3-2**に基づいて、各カテゴリーの回答状況を見ていく。

## 「各教科での多彩な情報活用の取り組み」

「各教科での多彩な情報活用の取り組み」のカテゴリでは、「①知識・語彙の拡大」から「⑤イメージ化と操作活動」の5つの項目を問うている。これらの中で、小・中学校ともに比較的高いのは「問6-15 与えられた課題や自分で設定した課題を解決するために、書物や文献、資料などを活用するといった活動を取り入れている」(小22%、中18%)、「問6-16 新たな事物や事象、抽象的な概念を授業で扱う時は、具体的にイメージできる物を提示したり、操作的な活動を取り入れている」(小28%、中18%)という項目である。「読解」の対象となるものは、文字で書かれた連続的なテキストだけでなく、地図やグラフ・写真・絵画など情報を有し考察の対象となるすべての物であり

事象である。この意味からも「読解力」向上の課題は、国語科だけの課題ではなく、すべての教科と領域の課題として取り組むことが求められている。

これらの項目に次ぐのが、小・中学校ともに「問6-13 読書に際しては、文学作品だけでなく、科学雑誌や実用書など多様なジャンルや形態の書物にも親しむように促している」という項目となっている(小17%、中13%)。第4章の“Special View”で、子どもの読む本のジャンルについての調査結果を報告しているが、多様なジャンルの本を幅広く読む子どものほうが「読解力」が高いことが示されており、文学関係にやや偏る現状への見直しを促すものとなっている。

## 「問題意識や意欲の喚起」

次の「問題意識や意欲の喚起」のカテゴリでは、「①ゆさぶり発問」～「④活動の目的理解・意識化」の4つの項目が設定されている。の中で、最も

数値が高いのは、小・中学校ともに「問6-17 子どもの固定したイメージや既得の知識をゆさぶる発問や教材を用意して、子どもたちを『思考』に誘

う授業を行っている」という項目であり(小23%、中17%)、反対に最も数値が低いのは、「問6-18 書かれたことを無条件に受け入れるだけでなく、その内容や論旨を評価・吟味して、批判的に読む」というような指導を取り入れている」という項目となっている(小5%、中5%)。「読解」のプロセスの「熟考・評価」の段階では自分の頭で考え意見を持つ力が問われるが、これは複数の多様な価値の中から何が自分にとって大切と考えるかを判断することを伴うものであり、この価値選択・判断の根拠をテキストや自分自身の経験・知識の中から見つけ出し論理的思考・批判的思考(critical thinking)によって結論を導く作業を行うことになる。授業の中で、日ごろから、多様なものの見方や多様な価値観を提示し、自分としては何がよいか・なぜよいかを考えさせる習慣を積み上げていくことが大切なのである。このような熟考・評価の力を高めるためには、必然的に、読解対象に対する主体的・批判的な態度の育成が必要となる。この点から見て、「主体的に、批判的に読む」というような

指導が、まだ非常に低い水準にあることは大きな課題である。「主体的に、批判的に読む指導」とは、子どもを一人の人間として認め、尊重するという意識に裏付けされて初めて成立する指導である。読解対象がどんなに伝統的な価値を有し社会的評価の確立したものであれ、無条件に受容し、味わい、鑑賞し、作者の意図を汲み取るといった側面のみを強調するような指導からの脱却を「PISA型読解力」は求めている。国立教育政策研究所の有元秀文総括研究官は、OECDのPISA調査で日本の子どもの無答率が欧米諸国よりも際立って高いという問題を指摘し、これを「沈黙の文化」と呼んで警鐘を鳴らしているが、このような問題状況の根底には、「子どもを一人の人間として尊重する」「子ども自身の考え・意見を大事にする」という意識の確立がまだ十分ではないという状況があると言えよう。「読解力」育成の課題は、「読解技術」育成の課題や指導計画作成の課題という以前に、意識改革の課題であり、学校のカルチャーを見直すという課題である。

### 「学び合う集団の形成」

次に、「学び合う集団形成」のカテゴリーについて見ていこう。このカテゴリーでは、「①モラルの向上」から「④健全な人間関係」の4つの項目を設けている。このカテゴリーの項目は、他のカテゴリーと比べて、どれも比較的に数値が高く、とくに「③相互理解・相互尊重」の「問6-23 互いの個性や考え、能力の違いを理解し、尊重し、認め合うようなクラスの雰囲気を作り上げるように努めている」という項目では(小41%、中34%)、セカンドボックスまでの合計で見ると小・中学校ともに9割を超えている。子ども同士が相互に尊重し、高め合うような集団形成は、「読解力」育成にとって非常に大切であることは、後で実証されている通りである。しかし、前のカテゴリーのデー

タで見たように、読解対象に対して、子どもに無条件的な受容を求める結果となっているような指導がまだ多いことがうかがえ、子どもが自分の意見を表明しにくい文化がある中で、子ども同士の学び合いは、どの程度、実際に成立しているものなのだろうか。読解対象の「情報の読み取り」や「解釈」レベルにおいての考え・意見の交換ではなく、テキストの内容・論旨・価値観そのものに対する自分自身の意見や考え、自分自身の価値観がどれだけ相互に交流でき高め合っているであろうか。「集団での学び合い」の在り方とその「質」については、まだ小さくない課題があることがデータから推察される。

## 「基本スキル指導と演習」

「基本スキル指導と演習」のカテゴリーでは、「①読解の基本的指導」「②論理的思考の訓練・演習」「③表現活動の指導」「④国語科での指導の適用」という4つの項目を設け、それぞれ複数設問を設定している。

このカテゴリーで、「とてもあてはまる」とするトップボックスが相対的に高いのは、小学校では、「②論理的思考の訓練・演習」の「問7-5 教科指導や総合的学習において、自分の経験や知識から、予想を立てさせたり、自分なりの解釈をさせたりする」(27%、中20%)、「①読解の基本的指導」の「問7-9 文章や資料に示された内容を、図式化したり、わかりやすい表現や自分のことばに置き換えてみるように促す」(26%、中18%)、「③表現活動の指導」の「問7-12 読み手や聞き手を意識して、相手が納得するように文章を書かせたり、発表させたりする」(24%、中18%)などとなって

いる。中学校では、「③表現活動の指導」の「問7-12」(上記)と「問7-2 教科指導において、具体的な事例から一般的な結論を考察させたり、一般的な結論を具体的な事例に当てはめて考えさせる」(21%、小14%)、および「①読解の基本的指導」の「問7-9」(上記)などとなっている。読解対象の内容について、解釈させたり、自分のことばに置き換えてみるといった指導は、比較的行われていることがうかがえるのであるが、「問7-7 文章や資料に書かれたことについて、その客観性や妥当性、論理性といった観点から評価・吟味しながら読み解かせる」といった読解対象の評価・吟味、すなわち批判的思考を促すような指導となると非常に低調であることがうかがえる(小5%、中6%)。これは、前述した「主体的、批判的に読む」指導の弱さに対応していることは言うまでもない。

## 「適切な課題・教材の開発」

次の「適切な課題・教材の開発」のカテゴリーでは、「①知的好奇心の喚起」から「④リアリティのある課題」の4つの項目を設けている。このカテゴリーで、小・中学校ともに、最も高い数値を示しているのは「問7-16 子どもたちの知的好奇心を刺激し、挑戦意欲を喚起するような素材や課題、教材を開発し、授業を構成する」という項目であ

り(小23%、中28%)となっており、次いで「意思決定を求める課題」(問7-17)や「複数の解がある課題」(問7-18)の開発となっている。子どもの価値観を揺さぶり、アイデンティティを自らに問うような教材の開発は、「読解力」の育成にとって大切であり、今後より活発になされるようになることを期待したい。

図表2-3-2 「読解力」向上に関わる「教師の日常的な学習指導」の状況(1)

■ とてもあてはまる ■ まああてはまる □ あまりあてはまらない □ まったくあてはまらない □ 無回答

設問のカテゴリー	小学校教師(%)				設問番号	設 問	中学校教師(%)						
	100	80	60	40			0	0	20	40	60	80	100
Ⅲ-a 各教科での多様な情報活用での取り組み	①知識・語彙の拡大	3.1	43.2	44.8	5.4	問6-12	新聞や雑誌記事等の幅広い素材を用いて、現代的な課題や社会事象を含めた知識や語彙を豊かにさせる工夫をしている。	12.2	46.8	35.9	2.4		
	②視野・関心の拡大	3.5	1.4	25.7	52.9	16.6	問6-13	読書に際しては、文学作品だけでなく、科学雑誌や実用書など多様なジャンルや形態の書物にも親しむように促している。	12.6	47.0	34.6	2.6	
	③論拠や裏づけ探し	3.5	2.1	31.9	49.9	12.7	問6-14	自らの主張や考えを裏付けるための証拠や根拠を探る目的で書物や文献、資料などを活用するといった活動を取り入れている。	12.0	42.3	40.4	2.4	
	④自らの課題解決活動	3.3	1.1	14.1	60.0	21.5	問6-15	与えられた課題や自分で設定した課題を解決するために、書物や文献、資料を活用するといった活動を取り入れている。	18.4	53.0	23.7	2.3	
	⑤イメージ化と操作活動	3.3	0.1	8.5	60.0	28.2	問6-16	新たな事物や事象、抽象的な概念を授業で扱う時は、具体的にイメージできる物を提示したり、操作的な活動を取り入れるようにしている。	18.4	53.8	24.1	2.3	
Ⅲ-b 意欲の喚起や問題意識の醸成	①ゆさぶり発問	3.3	16.3	57.7	22.5	問6-17	子どもの固定したイメージや既得の知識をゆさぶる発問や教材を用意して、子ども達を「思考」に誘う授業を行っている。	16.7	56.2	23.9	2.1		
	②主体的な読み指導	3.5	5.3	54.3	32.5	問6-18	書かれたことを無条件に受け入れるだけでなく、その内容や論旨を評価・吟味して、批判的に読むというような指導を取り入れている。	4.5	32.9	54.9	5.5		
	③学習の必然性up	3.5	0.4	23.2	57.7	15.2	問6-19	話すこと、読むこと、書くことの必要性やリアリティを高めるような教材や学習の場を計画的に用意している。	11.7	54.5	30.5	1.7	
	④活動の目的理解・意識化	3.5	1.0	22.6	59.6	13.4	問6-20	文章や資料を読ませる際は、何のために読むのか、読んでどうするのかを子どもたちにいつも意識させるようにしている。	10.2	50.2	36.1	1.7	
Ⅲ-c 学習の成り立ち	①モラルの向上	3.3	0.3	13.0	55.2	27.5	問6-21	クラス全体として協力して成し遂げるような課題やテーマを用意するなど、クラスのモラル向上を心がけている。	25.8	55.1	16.2	0.9	
	②思考の練り上げ	4.0	0.1	11.3	58.7	26.2	問6-22	教科指導や総合学習等で、グループでの協働や交流活動を計画的に行うなど、集団思考を促し、思考を深めていく指導を行っている。	26.5	60.9	10.5	2.1	
	③相互理解・相互尊重	3.6	0.0	5.0	53.0	40.9	問6-23	互いの個性や考え、能力の違いを理解し、尊重し、認め合うようなクラスの雰囲気を作り上げるように努めている。	33.8	58.5	5.8	1.9	
	④健全な人間関係構築	3.8	0.1	2.5	49.7	43.8	問6-24	クラス内での話し合いや発表の機会を積極的に設けるとともに、ふだんから何でも話し合える人間関係を築くように努めている。	30.6	57.3	10.2	0.2	
Ⅲ-d 基本スキル指導と演習	①読解の基本的指導	3.9	0.4	18.0	61.1	16.0	問7-1	文章や資料の読み取り、意見や考えのまとめ方、表現の仕方等の基本的なスキルやポイントを整理し、子どもに体系的に指導する。	13.2	57.0	26.5	1.9	
		4.5	0.8	14.2	54.5	25.5	問7-9	文章や資料に示された内容を、図式化したり、わかりやすい表現や自分のことばに置き換えてみるように促す。	18.0	52.4	24.8	1.5	
		4.9	1.1	15.9	56.2	22.0	問7-15	授業中のノートのとり方や整理の仕方、ノートを活用した予習・復習の方法を説明し、適宜ノート指導をする。	21.6	48.9	24.6	3.0	
	②論理的思考の訓練・演習	4.7	0.6	25.1	55.8	14.1	問7-2	教科指導において、具体的な事例から一般的な結論を考察させたり、一般的な結論を具体的な事例に当てはめて考えさせる。	20.9	53.0	22.9	0.9	
		4.5	0.8	22.6	58.2	13.9	問7-3	教科指導において、多くの資料や素材から一つの結論を導き出したり、限られた資料や素材から色々な考えや意見をふくらませたりする。	15.6	53.0	28.4	1.7	
		4.5	0.6	17.0	56.9	20.9	問7-4	教科指導や総合学習等で、問題解決の場面や課題を導入し、問題解決の一連のプロセスを子どもにたどらせる。	16.9	58.1	21.6	1.3	
		4.6	0.6	9.6	58.3	26.9	問7-5	教科指導や総合学習において、自分の経験や知識から、予想を立てさせたり、自分なりの解釈をさせたりする。	20.1	56.8	19.4	1.9	
		4.6	0.9	5.7	33.3	46.7	9.3	問7-6	同じテーマや題材について書かれた複数の文章を比較させ、共通点や相違点を整理させたり、自分の意見をまとめさせたりする。	8.1	40.2	42.7	1.5
		4.9	5.0	5.7	44.1	39.9	5.3	問7-7	文章や資料に書かれたことについて、その客観性や妥当性、論理性といった観点から評価・吟味しながら読み解かせる。	6.4	35.0	50.0	2.3
	③表現活動の指導	5.0	4.2	13.8	48.1	28.9	問7-10	社説や小論文のような論理的な文章をモデルとして示し、その構造や展開、形態等を模倣したり、参考にしたりして、文章を書かせる。	6.4	25.2	52.1	13.5	
		1.5	14.1	60.4	19.4	問7-11	意見や考えを表現させるときは、その根拠を明らかにしたり、適切な事例を用いたりして、文章を書かせたり、発表させたりする。	16.9	52.4	25.9	3.2		
		4.6	0.8	10.2	60.5	24.0	問7-12	読み手や聞き手を意識して、相手が納得するように文章を書かせたり、発表させたりする。	17.7	51.9	25.2	1.5	
		4.5	3.2	34.6	43.4	13.9	問7-14	毎時の授業に、意見を書く、まとめる、論ずる等の活動の時間を計画的に組み込む。	9.0	32.7	46.2	3.4	
④国語科での指導の適用	4.9	2.6	25.0	51.7	15.3	問7-13	国語科でなされている読解指導の内容や方法を、他の教科指導でも応用・適用する。	5.5	25.6	53.9	11.3		

図表2-3-2 「読解力」向上に関わる「教師の日常的な学習指導」の状況(2)



- ・「Ⅲ-e. 適切な課題・教材の開発」の「④リアリティある課題」に対応する設問は、前ページに示した「Ⅲ-b. 問題意識や意欲の喚起」の「③学習の必然性UP」と同じ設問を用いている。
- ・第2章1節の構造モデルでは「Ⅲ-g. 読解活動へと誘う強化因子の付与」の下位項目として「④実社会の壁」を設定しているが、今回の調査項目としては割愛している。

### 「モニタリングスキルの育成」

「モニタリングスキルの育成」のカテゴリーでは、「①メタ認知力の育成」から「③解決への見通しとめやす」の3つの項目を設定している。モニタリングスキルの育成は、学習の自己評価の力を育成することであり、自分の学習活動を自ら「読解」することである。このような活動も「自らの評価」と「他者への評価」を相互に交流し合い、熟考・評価の対象としていくことが大切であろう。「問7-19 自分の学習活動や思考の状況を内省させたり、心の動きを文章で表現させたりする」という項目では、小学校16%、中学校12%となっているが、これはとくに「読解」指導として意識された取り組みを表す数値ではないだろう。しかし、教科や領域

は何であれ、このモニタリングの活動も、「読解力」向上の一つの場面・機会となりうる。すなわち、学習活動の文脈の中でどこに注目し（「情報の読み取り」）、どんな根拠で評価を行ったか、そのような評価を下すことは自分と他者にとってどんな意味があるのか（「解釈」）、そして多様なスタイル・方法・課題がある中で自分（あるいは他者）にとってどうすることが望ましいのかを考える（「熟考・評価」というプロセスは「読解」のプロセスそのものである。今後は、このような活動においても、「読解力」向上の視点からの取り組みの充実が期待されるのである。

### 「読解活動へ誘う強化因子の付与」

最後の「読解活動へ誘う強化因子の付与」のカテゴリーでは、「①必然性の自覚」「②挑戦意欲の喚起」「③効用・意義の実感」の3つの項目を設けている。「効用・意義の実感」や「必然性の自覚」とは、言い換えれば、「課題解決のための学習」「目的をもった学習」を重視するということであり、これは「実生活での問題状況での主体的活動」を可能とするための学び、「社会参画を志向した学び」を大切にすることである。このことが、「読解活動」に子どもにとって学ぶ意義と目的を与え、読解のプロセスを牽引していくことにつながるのである。しかし、「問7-24 実社会における現実的な課題解決の場面を通して、課題解決における必要十分

条件を実感させたり、自分の取り組みを見直したりする」という項目では、小・中学校ともに、「とてもあてはまる」とするトップボックスの数値は1割に満たず、また「問7-23 日常生活や身の回り事象や課題に題材にし、それらの課題解決を通して、学習活動の有効性を実感させる場を用意」という項目も、小・中学校ともに15%程度にすぎない。学びと社会とを結びつけ、そこに学びの意義を発見させることはキャリア教育の課題でもある。「読解力」向上の課題を、キャリア教育との関連においても学校教育全体の中で構想され位置づけられることを期待したい。

## おわりに

今回も前回の調査で報告した「教師の指導力」のFANモデルに基づく調査も併せて行なっているが結果の報告は割愛させていただいた。この調査については、前回の報告書を参照していただきたい。この「教師の指導力」のFANモデルとともに、今回の「読解力」向上に関わる取り組みの「構造モデル」に基づく調査結果が、今後、学校での「読解力」向上の取り組みを構想していく上で少しでも参考になれば幸いである。